ITP-EUROPA 派遣報告書　　博士後期課程　　秋野有紀

2009 年 6 月から 11 月まで、日独の共同指導による博士論文を完成させるためにTUFS-ITP-EUROPA によりドイツ・ヒルデスハイム大学の文化政策研究所に派遣していただきました。私のその研究期間もあっという間に過ぎ去り、帰国することとなりました。

当初の派遣計画・課題は、ドイツ語と日本語の博士論文を完成させ、2010 年 1 月のドイツ語での口述試験を受けるということでした。途中で母の手術などで一時帰国したこともあったのですが、何とかこの計画を無事に遂行し、期限通りに博士論文を提出できたことにほっとしています。

インタビューや調査、シンポジウムへの参加・発表、ヨーロッパ全土の若手研究者が集まる 1 ヶ月に渡る研究合宿への参加・交流・発表などは、前回の留学中に終えていたため、今回の派遣期間は、ほぼ全ての時間を博士論文の執筆・完成に費やすこととなりました。指導教員のシュナイダー教授は毎月のように世界中を飛び回り、講演されている方なので、常にお忙しいのですが、面談や電話、メールなどで頻繁に綿密な論文指導をしていただきました。また、シュナイダー教授をはじめとする文化政策研究所の教授陣、研究員からは、とりわけプレゼンテーションの技術や円滑なチーム研究の仕方について、学ぶことも多かったです。今回の派遣期間中の主な成果は、6 月にボンの＜文化の家＞で研究発表を行ったこと、外語大のドイツ語ドイツ文化研究室の研究誌『Der Keim』に論文を執筆したこと、必要なエキスパート・インタビューを全て計画通りに終え、博士論文を完成させたことなどとなりました。また、お陰様で派遣期間中に 2010 年 4 月から 3 年間の JSPS 特別研究員-PD の採用内定のお知らせをいただくことが出来ました。

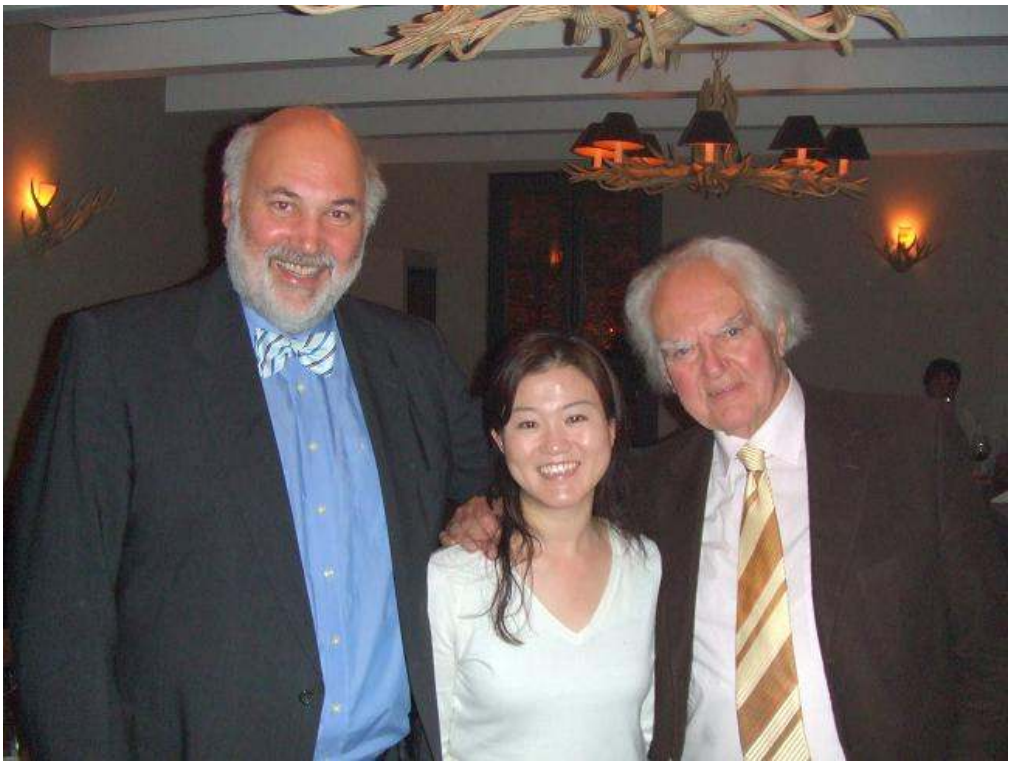
ドイツでは生活面、研究面双方において不便なことは皆無に等しかったのですが、それはひとえにドイツ、日本の指導教員をはじめとする周りの方々の親切なサポートのお陰でした。

最後に、私が博士課程の研究者としてヒルデスハイムに滞在し、とりわけ有意義だと感じたプログラムをひとつご紹介したいと思います。ヒルデスハイムには、博士論文を書いている研究者へのサポート・システムがいくつかありました。それらは数年単位のプロジェクト・ベースで運営されており、私がいた頃にも様々なプロジェクトがありました。シュナイダー教授に勧められて私が利用したのは、女性研究者が博士号をとるためのサポートを行うもので、博士論文の指導教員の他にもうひとり、博士号を取得した経験のある研究者がメンターとして研究の過程に付き添い、必要な時には（主に研究とは関係ない）相談に乗ってくださるというものでした。研究に無関係ではないものの、直接結びつくのか曖昧で、指導教員に研究以外の私的な悩みなどを相談してもいいものだろうか、と思うような問題はこのメンターが相談に乗ってくれました。私のメンターは文学部の教授で副学長を務めている方でした。私の場合、指導教員のシュナイダー教授がとても話し易い方だったのと、他の研究所の先生方も様々なご縁からプライベートでよく知っており友人として相談に乗ってくれる方が比較的多かったので、まださらにメンターが必要ということはあまりなかったのですが、それでも日本人が一人という環境で、ヒルデスハイムの様々な

先生方に折に触れて気遣っていただいたことは、大変心強いものでした。また博士課程の研究者が月に１度ヒルデスハイムに集い、学際的な共同シンポジウムを行うとともに、週に二回ほどの学部のゼミを持ちながら教鞭をとる訓練をするというプロジェクトもありました。私はこのプロジェクトには参加していなかったのですが、言語学で博士論文を書いている仲のよい友人がこちらに参加しており、博士論文を執筆中の者なら誰でも参加できるパーティーに誘ってくれた際に、他の分野の研究者たちの考え方を知ることができ、非常に有意義でした。これらのプログラムは、公的な助成金で運営されており、最初の申請で選抜がありますが､参加できることになった場合､参加者の負担は年間 50 ユーロのみで、様々な勉強会・講演会に参加し、メンターに相談に乗ってもらうことができます。参加の際に約束させられることは、①連絡がとれない状況にならないこと（自分が採用されたということは、他の参加したかった人を犠牲にしているということなので、ちゃんと参加すること）と②自分が博士論文を書けないだろうと思った場合、「見切り」を適切な時期に自分でつける勇気を持つこと（メンターの先生達はお忙しい中でのボランティアなので、しばらく研究して自分で研究には向いてないと悟った場合は、長くつきあわせてはいけない）の二点でした。他にも学術論文の書き方講座などもありました。私はネイティブではないので参加できないかと思ったのですが､初回にやってきた人が３名しかいなかったせいか、快く仲間に入れてもらえました。しかも、この講座の初回のテーマは、なぜか「書き方」とは一見関係なさそうな､「効率のよい１日の時間の使い方」で、自分が研究に費やすことのできる時間の把握、無駄にしている時間の把握から始まりました。毎月テーマの変わる勉強会は、奨学金や研究資金を得る為の申請書の書き方、面接の受け方からプレゼンテーションのコツ、論文執筆に役立つツールの使い方から、研究発表の場の見つけ方、発表の手順まで様々なものがあり、学際的な講演会も多く、普段は、自分の研究領域のみに没頭しがちですが、また違った視点から多くの刺激を受ける事ができました。博士論文を書こうとしている者同士で悩みの共有もでき、こんなことで悩んでいるのは私だけではないのだ、私が留学生だからわからないのではなかったのか、などと幾度も励まされました。仲良くなった友人達とは、プロジェクトが終わってからも一緒に食事に行ったりし、良い友人に恵まれたのも、こうしたプロジェクトのお陰だと思っています。日本人の私から見ると時々、過保護なのではないか？と思うようなテーマもありましたが、自分が悩んだことで後輩も悩まないで済むようにと次の世代に情報やテクニックを渡していき、大学全体でノウハウを蓄積し、研究者達に対し、システマティックに博士論文を執筆できる環境を整えてくれるという点では大いに助けられたように思います。

帰国はしましたが、今後も交流や研究の情報交換は続けていきたく思っています。2010 年 7 月には、文化政策関連の大規模な記念シンポジウムがドイツであり、シュナイダー教授の薦めで、博士論文の中から部分的に発表することにもなりそうです。

最後になりましたが、ご指導いただいたヒルデスハイム大学の先生方、東京外国語大学の先生方をはじめ、ITP や共同指導協定の関係で事務の方々にも大変お世話になりました。この場を借りて、御礼を申し上げさせていただきます。



シュナイダー教授（左）、報告者（中央）、ゲーテ・インスティテュートの元総裁で文化政策のパイオニアとしてドイツでは「文化の法王」と呼ばれるヒルマー・ホフマン教授（左）。このホフマン教授のフランクフルト時代の文化政策が私の専門である。

ゼミの後、文化政策研究所恒例の「無礼講」での意見交換（というかお喋りが延々続き、夜中になる）食事会の一コマ。フランスの文化政策が専門のハイケ・デンシャルマン講師（左）、報告者、シュナイダー教授（右）